

児童の発達段階と到達目標にふさわしい小学校「外国語活動・外国語科」授業の一考察

谷本 みか（千葉経済大学附属高等学校）

はじめに

文部科学省が2011年より「外国語活動」を必修科目として小学校に導入し、それから7年が経過しました。小学校5・6年生で英語を学んだ生徒は、中学校、高等学校へと進学し、社会人となっています。

私は高校生と社会人の英語教育を、授業という形で30年以上担当してきました。現在の高校生や新社会人の英語力は、小学校「外国語活動」が始まる前と比較すると、個人差はあるにせよ確実に向上していることを実感します。特に、音声能力の向上を感じます。

しかし、音声面での効果を感じる一方、現在の高校生や社会人の英語に対する意識には大きな変化が感じられません。残念なことに、「英語が好きでない」生徒は依然として多く、自分の英語力に肯定感を持つ生徒数の増加につながっていない現状です。「外国語活動」が必修科目になる以前の生徒達と同様に、「英語は聞いてもわからない、読めない、話せない、書けない」と言います。

生徒達に「君たちは小学校で英語学習を経験しているのだから、もっと自信を持って英語に取り組もうよ。」と言うと、決まって「小学校では、歌って、遊んで、ゲームしただけ。」という返事がかえってきます。ここから、生徒達は小学校での英語活動が英語力向上につながっていると感じていないことがうかがわれます。生徒達は、小学校で自分たちが行った外国語活動に価値を感じていない、その結果、自分の英語力に肯定感を持っていないのです。

日本人が、中学生・高校生や社会人になってその効果や価値が感じられ、英語力に肯定感が持てるようになるための小学校外国語活動とは、どのような活動なのでしょう。

2020年の小学校3・4年の外国語活動新設、小学校5・6年の教科型拡充をも見据えて、児童の発達段階と文科省の設定する到達目標にふさわしい英語活動を考察します。

1. 小学校における外国語教育改革

小学校「外国語活動」は5, 6年生を対象に2011年に必修となり、週1コマ程度の活動が行われています。【平成26年度小学校外国語活動実施状況調査】では、小学校5, 6年生の72.3%が、中学1年生の60.2%が「英語の授業が好き」と回答しています。この回答は、小学校「外国語活動」の効果の現れと言えるでしょう。現在は文科省の方針で、小学校では文字指導はせず、アルファベット文字に親しむことに限定した活動のみを行っています。しかし、中学校1年生の約8割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文を書く」をもっとしておきたかったと回答しています。小学生は意味のある「読む・書く」活動もしたいという気持ちを持っていることが読み取れます。「読む」「書く」を含めた言語活動への知的欲求が、小学生でも高まっているのです。

この結果を受け、2013年の「グローバル化に対応した英語教育改革」では2020年度に3, 4年生の英語必修化、5, 6年生の教科化が発表されました。3, 4年生では週1コマ程度、5, 6年生では週2コマへ増加に加えて、指導内容に600～700程度の英単

語や連語、慣用表現が含まれます。小学校でも、自分の意見や考えを、話したり書いたりすることが出来る発信能力の育成が、目標となっています。

2. 小学校における英語早期教育の効果

小学校における英語早期教育の効果は、小学校英語の導入前から賛成・反対の議論が交わされて来ました。その理由として、これまで日本では小学校での英語学習の言語運用面での成果に関する研究が少ないことがあげられます。現在、多くの研究が実施されており、より多くのデータが集まることで小学校から英語学習を開始する意義が証明されることが期待されます。

発音に関しては、早く始めた方がいいということがわかっています。いわゆる言語習得の「臨界期」は、音声面でのみその存在が認められています。学年が低いほど英語の発音を敏感にとらえ、より英語的な発音を身につけるのに適していると言われていています。私も授業実践を通して、2011年から必修になった小学校「外国語活動」は、確実に音声面での効果を出していると実感します。

3. 中学校・高等学校における外国語教育改革

【平成26年度小学校外国語活動実施状況調査】では、小学校5、6年生の72.3%が、中学1年生の60.2%が「英語の授業が好き」と回答しています。しかし、高校生になるとどうでしょうか。**【平成27年度英語教育改善の為に英語力調査】**によると、高校3年生の54.9%が「英語の学習が好きでない」と回答しています。なぜ高校生になると、「英語の授業が好き」という生徒の割合が下がってしまうのでしょうか。

【平成26年度小学校外国語活動実施状況調査】によると、自分の意見や考えを話すことができると思う中学2年生の生徒の割合は33.6%、書いたりすることができると考える中学2年生生徒の割合は20.7%でした。発信能力に課題を感じている生徒の割合は高いことがわかります。**【平成27年度英語教育改善の為に英語力調査】**では、高校生でも授業で「聞いたり」「読んだり」したことに基づいて英語で話し合ったり意見交換したりする経験がある」と回答した生徒は41.8%でした。技能統合型でコミュニケーション中心の言語活動を行っている生徒の割合が依然として少ないことが原因ではないかと推測されます。その結果、**【平成27年度英語教育実施状況調査】**では、文科省の目標とする「初歩的な英語を書いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる」（英検であれば3級程度以上）の目標を達成している公立中学3年生は約35%、「英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる」（英検であれば準2～2級程度以上）の目標を達成している公立高校3年生は約32%しかいないことが報告されています。この数字は、文科省の目標とする50%にはまだ遠く、2020年の外国語教育改革の課題とされています。

2021年、2022年の中学校・高等学校学習指導要領改定では、中学校でも授業は外国語で行うことを基本とし準2級程度を目標に、高等学校では「発表、討論・議論、交渉等の発進力を強化する言語活動の充実」が加えられ準1級程度を目標とされました。今後はこの高い目標を達成するために、生徒・児童の英語に対する興味関心、学習に

対する積極的な姿勢、英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度をどのように養い、授業や評価テストの改善が課題になります。

私は、24年前から千葉県消防学校で初任科消防英語の授業を担当しています。10年前から、統合型でコミュニケーション中心の言語活動を取り入れ授業展開しています。授業や評価テストの改善が、学生の学習意欲や英語力向上に効果をだしています。消防士に必要なとされるコミュニケーション能力は、コミュニケーションの目的、言語機能（言葉の働き）が職業の場面に限定されています。目標が明確なことから、カリキュラムもわかりやすく、事実に関する情報を伝え、求め、報告する、訪ねるといった言語機能に焦点を当ててコミュニケーション中心の言語活動を行っています。全9時間という少ない時間で最大限の効果を出すために、1時間をふり返りと目標の到達度チェックにあて、残りの8時間はペアやグループでの言語活動を行っています。職業に関する英単語を覚えることは大切です。しかし、活動が英単語のインプットだけで終わらないように、アウトプットをメインに設定しています。伝えるために表情やジェスチャーや、相手に伝える工夫もしてもらいます。アウトプット活動中の私の役目は、わからないところの質問に答えながら、最善を尽くすように働きかけることとなります。ふり返りには、伝えたり伝わった経験が自信になった、もつと的確に伝えるためにさらに英語学習を続ける気持ちになった、との記述が多く見られます。学習の効果や価値が感じられ、英語力に肯定感が持てるようになったことがうかがわれます。最後に実施する効果測定テストでは、ほぼ全員が高い目標をクリアしています。

統合型でコミュニケーション中心の言語活動が効果があることが実感できたので、高校の授業も、統合型でコミュニケーション中心の言語活動に変えました。目標を「英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができること」に設定し、教師主導の指導（Teaching）が主体の授業から、教師が援助者（Facilitator）として働く授業に変えました。ペアやグループでの外国語活動を中心に置き、英語を使って人と関わる楽しさを体感し、自分の思いを英語で伝える経験大切に授業を組み立てています。教材も、学習者にとって意味のあるFunではなくInterestingものを選んでいきます。日本語訳、文法は、教科書準拠の予習ノートを家庭で学習すれば身につくようにできています。自立した学習者として、必ず予習ノートは家庭で学習するように伝えてたところ、やってこない生徒がいないことに少し驚きました。生徒の主体性、潜在能力を信じていなかった自分に気づきました。この授業を1年生から受けている生徒は、現在2年生の3月です。20人中、英検2級合格者が6名、準2級合格者が5名、確実に実力がついていくことが実感されました。訳読・文法中心の授業を行わなくとも、それ以上の英語力が身につけています。

4. 中学生・高校生や社会人になってその効果や価値が感じられ、英語力に肯定感が持てるようになるための小学校外国語活動とは

高等学校では3. で前述したように、統合型でコミュニケーション中心の言語活動に授業が変化することにより、生徒の英語に対する興味関心、学習に対する積極的な姿勢、英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度が高まり、その効果が確かめられたと思います。

生徒達が「小学校では、歌って、遊んで、ゲームしただけ。」と思っている小学校外国

語活動を、英語力に自信を持って中学校、高等学校、生涯学習として英語学習を進めていく授業に変化させるには、小学校外国語活動を今後どう改善していけばよいのでしょうか。平成25年に公表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、専科教員やALTを増やすこと、コマ数の増加や学習単語の増加が発表されました。しかし私は、これだけでは中学校英語の「先取り」は出来ても、言語運用能力の基礎的学びは身に付かないと考えます。活動の改革が必要です。児童が身近で簡単な表現を用いながら、自分で考えたことや感じたことが発話する言語活動を行いたいと考えます。さらに、発せられた情報を興味を持って受け取り、さらに情報交換につながるような言語活動を行いたいです。その際、児童は発音に自信を持って年齢に応じた英語活動に取り組むことで、英語力にさらに肯定感が持てるようになると考えました。

そのような活動のヒントが、江尻寛正教諭（元岡山県小学校教諭）の日本児童英語教育学会第38回全国大会の実践発表にありました。

今日はキーワードゲームがすごく楽しかったです。またやりたいです。
次の英語も楽しみです。

と授業後のふりかえりカードに感想文が書かれていたのを読んだ江尻教諭が、「”英語を楽しみにしている”と書いてはいるが、”ゲームが楽しい”といのが本音だろう。」と違和感を持ち、「ゲームが楽しいという授業は、子どもがよりよい人生を送ることに本当につながっているのだろうか」と自問します。

実際に小学校の現場では、英語に対する興味や学習習熟度が様々な児童を一斉に指導する際に、ゲームは英語を興味深いものとして児童をひきつけつつ学習事項を教えるには効果的な活動として多く活用されています。教える側の教師と、学ぶ側の児童の双方に有効であるとの考えが、根本にあります。しかし、生徒は小学校での英語活動が自分たちの英語力向上につながっていないことを、早い段階で気づいています。小学校で自分たちが行った外国語活動に価値を感じられず、「小学校では、歌って、遊んで、ゲームしただけ。」という認識で中学校・高等学校に進学しているのです。

江尻教諭は自問を受けて新しい英語活動を実践します。江尻教諭の発表では、目指す子供の学びの姿として次のようなイメージを持ち実践を展開したことが述べられています。

相手が喜ぶことを考えたり、友だちと一緒に楽しんだりする気持ちをもち（【主体性・多様性・共働性・学びに向かう力・人間性など】）、相手にどうすれば思いが伝わるかを考えながら（【思考力・判断力・表現力等】）、自分の知っている言葉を身振り手振りとともに使って（【個別の知識・技能】）人とかわろうとする（【コミュニケーション能力の素地】）。

モジュール（短時間学習）で以下のような授業実践を行っています。

(1) ペアトーク

朝の会で行う。聞き手としての力を育てる。日本語での質問のスキルを身につけ、円滑に対話ができるファシリテーターとしての力を養う。

(2) ペアトーク（英語版）

朝の会で行う。相手が単語レベルで話す英語を聞いて、何が言いたいかを考えながら日本語での質問で答えを引き出していく。

(3) Change Game

モジュールで行う。英語と身振り手振りで相手に単語を伝える。自分の知っている単語に言い換えて伝える経験を積む。

(4) Talk Time

モジュールで行う。英語だけで話を続けることを目標とする。言えない言葉を見つける経験にして、語彙や表現を増やしていく。

(5) "You can"Time

モジュールで行う。その日のヒーローに英語で種々の質問をする。その後、ヒーローのできることを友達と話し合い、英語で伝える。

"You can"Timeを取り入れた2学期で、学年末に書かれた振り返りが紹介されています。

1学期も楽しかったけど、2学期の英語はもっと楽しかったです。特にクラスの友達のできることを英語で言う活動は、言われている人は、ちょっとはずかしいかもしれないけど、絶対うれしいと思うので良いと思いました。

江尻教諭は、この感想から、児童が「自分の言葉の力を実感し、よりよく人とかかわろうとしている子供の内面を感じることができるのではないだろうか。」と締めくくっています。私は、このような活動がこれからの小学校外国語活動の中心を占めるべきだと強く考えます。

5. 終わりに

「児童が自分の言葉の力を実感し、よりよく人とかかわろうとしている」活動を積極的に取り入れることで、日本の外国語教育を抜本的に強化する小学校外国語になると考えます。それには、小学校英語の指導にあたる教師の資質や能力、専門性向上が必須です。

教師は、自分が受けた授業をもとに授業を計画するといわれています。学生時代に受けた授業がインプット中心の授業だった場合は、これを克服する必要があります。困難な作業になると思いますが、これからの小学校英語教員養成には必須です。「児童が自分の言葉の力を実感し、よりよく人とかかわろうとしている」活動を積極的に研究し、実践する必要があります。

これらのことをふまえ、これからの英語教育のあり方を短大の学生達と一緒に考えながら、新しい英語教師観を構築していきます。児童が中学生・高校生、社会人になっても英語学習の効果や価値が感じられ、英語力に肯定感が持てるような小学校外国語活動に携わる英語教育者を育てます。